



中高生とともに差別と闘う

『人権子ども塾』レポート 『人・こと・パシヨ』



吉成タダシ (うずしおブランチ代表)

三月二十一日 1期開講式

前号までの一年間、本当にアツという間の活動でした。すべてが手探りでした。それは私たち子どもたちも同じだったと思います。それでも、充実していたことは確かでした。

開講式には、最後まで参加したメンバー十人が出席しました。そのうち開講式のときにいたオリジナルメンバーは、三人だけです。受験生が途中から来られなくなってしまうこと。思っていたような会でないとならなくなってしまうこと。いろんな理由で来れなくなってしまう子が出てくるであろうことは予想していました。特に部活動をしている子にとっては、先の予定なんて分かりません。でもその逆に、途中から参加しようとする子がこれだけ出てきたのは、うれしい誤算でした。

式には他に、数名のギャラリイも参加してくれました。子ども塾の活動に関心を寄せてくれる大人たちであり、活動中に出会った方たちです。それだけ、関心を寄せてくれる人がいるということ。まずは冒頭、本会の共同代表から、はなむけの話。「この会があったてよかった。いきがいが生まれた」といった、感謝の言葉。また、出会いとつながりの大切さについて。そして、1期生としての認定証を、一人一人に贈呈していきます。ほのぼのとしたなかに、どこか厳粛な雰囲気漂います。笑顔とピースが場を和ませます。寄せ書き

タイムのあと、最後のトーク・オーバー。私たちの証です。

ある子は、中学生集会に行き始めたいきさつや、不登校から勉強を始めた経験。運と出会いに恵まれたと、感謝の言葉を語ります。ある子は、もつと早くに来ていればよかった。視野が広がられたと語ります。

ある子は、ずっと人からどう見られているか気にしていた。クラスも部活も生徒会も本当にキツかった。ここは他の人の話が聞ける貴重な場だったと語ります。

ギャラリイからも励ましのエールをいただきます。誰かの頑張りや絶対「ひとり」にせず、頑張りに応じて必ず「つながる」。それが、**「応答」**であり、**「癒し」**なのだと思わされます。

今回を最後に卒業することを決めたオリジナルメンバーの一人が、最後に語ります。小学校時代のキツかった思い出。中学生になつてからの人権学習との出会い。中学生集会での頑張り。自身の成長と変容。思いの丈を語るその姿がすごくうれしかったし、頼もしく感じられました。次のステージに向けてがんばれ！とエールを贈りたい気持ちでいっぱいになりました。最後はみんな、笑顔いっぱい集合写真。

人・こと・パシヨ

人権子ども塾の取り組みは、全国どこでもできる取り組みです。各地にある、人権にまつわる「人・

こと(出来事)・パシヨ」と子どもたちを具体的につなげていく取り組みです。そして各地のそんな取り組みが共有できれば、それがまた互いの財産となっていくでしょう。

「ライフツーリズム」を提唱しています。各地にある、生命にまつわる「人・こと・パシヨ」をコンテンツとして発掘し、学び巡るとういうものです。まずは瀬戸内六県。それだけでもたくさんあります。ぜひとも出向き、「人・こと・パシヨ」と出会っていただきたい。子どもたちにも出会わせたい。その一つ一つが、貴重な人類の財産です。

人権子ども塾をしていて感じたことは、その学びの一つ一つが揺るぎない確固たるテーマであり、どれもが一つのドラマとして存在感を放っているということ。まるで一冊の本を、早送りでフィールドワークしているようなものです。

それは、人権をテーマに学んできた先輩たちとの「出会い」でもいいと思います。時空を超えた出会いが、今を生きている子どもたちの未来づくりのお手伝いとなるならば、それは互いにとつてWinWin inとなるのではないのでしょうか。

四月二十三日 2期開講式

そして今春、2期がスタートしました。1期生からの継続参加者九人に、新規加入者六人を加え、十五人での船出です。一人一言の

自己紹介だけでも二十分。うれしかったのは、高校に進学した三人みんなが、申し合わせたように人権部に入部したという事実。そしてその高校生が中心となって、三つのグループに分かれてグループワークを進めていきます。それはもう頼もしいというほかありません。

塾を始めてから、「そんな子たちがいるなら話したい」と、様々な方面の活動家が声をかけてくれます。これもまた予想外のうれしい反響です。そんなこともあって今年度は十一月に、「人権子ども塾文化祭」を開催することにしました。群馬県にある重監房資料館でハンセン病問題に取り組んでおられる方、福島県から原発問題に取り組んでおられる方を招き、塾生の子たちと語り合ってもらい、それを来場者の方々に見てもらおうと同時に、語り合いにも参加してもらおうという企画です。大人には大人の見識があり、子どもには子どもの、純粹でフレッシュな視点があります。それぞれが融合することで、どんな化学反応が起こるか。今からワクワクしています。

2期は十五人でスタートしたと言いましたが、昨年に引き続き、仲間が仲間を呼び、今も増殖し続けている最中です。そう思うと、この活動、本当にまんざらでもありません。それだけ、結び付いてなかった魅力あるコンテンツが眠っていたということ。まだまだ夢は尽きません。乞うご期待！